

[桃山デザイン聚芳展によせて]

館藏品紹介 「稲富流鉄砲伝書」について

一夢に始まる稲富流の鉄砲術は、徳川家康はじめ有力武将に重用されました。そのため、豪華な伝書が制作されています。就中、当館所蔵の伝書は最優品の一つに数えられましょう。A＝慶長17年(1612)奥書19帖、B＝無年記1帖、C＝元和4年(1618)奥書1帖、合計21帖が伝存しています。

Aは松平忠直のために制作されたもので、濱口勘右衛門長久の伝授にかかります。葵・菊・桐の紋を入れた紺紙金泥彩の表紙、朱引地に金泥絵を施した題簽、縹・香の染紙に金銀箔を撒いた見返し、金銀泥絵を施した料紙。全体が金銀で飾られた豪華な折本です。

料紙の金銀泥絵は狩野派の画風を示します。稲富流鉄砲伝書は、普通、鳥獸や人物等の絵入りの巻に高い鑑賞性が求められますが、Aには含まれていません。散逸の可能性もあります。しかし、別に、寛永6年(1629)に忠直へ進上された「目当定」が遺り、それは鳥獸等の絵を伴う図解書です。すると、Aは金銀泥絵を見せることを最優先にして製作され、その目的に沿い難い絵が入る巻は、もとより省かれたように思われます。

金銀泥絵は料紙を継ぐ前に描いており、1紙ごとに図柄を異にし

ます。1筆ではありませんが、概して慶長期の規範となった狩野光信の様式を承けています。絵師の相違は雲の形に顕著にあらわれており、4つの個性が認められます。

①右へ指向をする細長い円弧が扁平の菱形にまとまる雲を描く絵師。最も優れた技術を示します。複雑に雲霞を配した空間構成は、光信の様式に最も忠実と言えます。その一方で、豪壮な巨大樹の表現は、狩野永徳の遺風を伝えています。多様な画題を手がけ、構図も破綻なくまとめます。

②左へ指向する円弧が扁平の扇形にまとまる雲を描く絵師。繊細すぎるきらいのある穏やかな画風は、やまと絵の風情をたたえます。画面にモチーフを均等に配すべく、植物の枝を長々と伸ばしたり湾曲させたりします。結果、構図は羅列的で散漫な印象を与えます。

③左へ指向する突出の弱い円弧が杏仁形にまとまる雲を描く絵師。この絵師は際立つ個性を見せます。雲霞の使用は画面の装飾を第一とし、結果、空間は平明になります。注目されるのはモチーフの選択です。寸胴の大樹と器物との組み合わせを好み、また、石榴・蘇鉄・鉄線・蜀葵・手鞠の木という異国の植物も多く手がけています。

④丸味の強い円弧が厚みをみせて小さくまとまる雲を描く絵師。かなりの若年者とみられ、技術の拙さが随所にあらわれています。

全体では、①が4割、②が3割、③が2割、④が1割を占めます。

基準作の乏しい当該時期の狩野派にあつては、絵師の名を比定することは困難です。ただし、巻末に上部を円弧で括った「光、」の落款が金泥で書かれています。同一人の描写密度の大きな落差、時に算線引きを待たない文字の書写は、絵師と書家との密接な提携下での急ぎの製作であったことを露呈します。金銀泥絵を見せる意図を併せ考えると、製作を主導した絵師の落款でしょう。それが誰かの探索は惜ましますが、料紙装飾に落款が入る例は非常に稀です。当時の記録によると、狩野派の絵師に外交文書の金銀泥絵を描かせることがありました。将軍の御用を務めていたことと無関係でないにせよ、この分野でも優れた手腕を発揮し、落款を入れてブランドを謳うに足る評価を得ていたことが知られます。本格的な遺品が殆ど知られていない現在、多様な意匠が展開するAは、その手腕を押し量る見本帖となりましょう。

BはAと法量を僅かに異にします。仕立ての順序も違い、料紙を継いだ後に巻頭と巻末に金銀泥絵を施しています。金銀泥絵は中途半端で、表紙も文字もなく、未完成に終わっています。ただし、巻頭・巻末の金銀泥絵には、それぞれAに筆を振るった②・①の絵師

の特徴があらわれており、Aと同時期の制作とみられます。未完成に残されたのは、この巻が絵入りであることと関係しているでしょう。

Cは忠直が中川右京に授与したもので、忠直の花押が入っています。料紙には金銀泥絵が施されていますが、絵師の流派の判断はつきかねます。注目されるのは、金箔を押しした見返しです。流水に16弁の菊紋が型で摺り出されています。これと同じ型は、忠直の直系に伝えられた「山中常盤」(MOA美術館)はじめ、幾つかのいわゆる岩佐又兵衛風絵巻群の見返しにも用いられています(四辻秀紀氏・戸田浩之氏の御教示による)。

又兵衛(1578～1650)は独特の奇矯な画風で知られる絵師です。元和2年に京都から忠直の領する福井に移住したと推されています。奇矯の大名忠直と奇矯の絵師又兵衛との関係は、今までに注意されてきましたが、両者を繋ぐ確たる証拠を欠いていました。そこで、Cの存在は大きいと言えます。

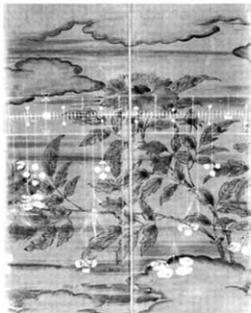
ところで、Aの見返しの箔散らしは、筆者不明ながら又兵衛風絵巻群と趣の通づる「歌舞伎図巻」(徳川美術館)のそれと近似することが指摘されています。又兵衛風絵巻群も「歌舞伎図巻」も元和末～寛永期の作とするのが通説です。A・C両者の存在は、従来の年代観に再考を要請しましょう。

当館所蔵の忠直ゆかりの稲富流鉄砲伝書は、自体の魅力とともに重要な問題を放ち、美術史上意義深い作品です。(澤田和人)

A・①の絵師



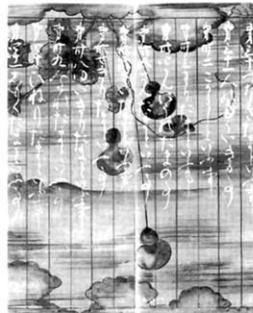
A・②の絵師



A・③の絵師



A・④の絵師



A・落款



C・見返し



季刊 美のたより No.130

平成12年2月17日

発行 大和文華館